

巻頭言 「薔薇とゆり」

宇野 元

10月に東京に帰省して、小さな庭の世話をし過ごすときを楽しみました。年を経たばらたちは、秋の花また蕾をつけていました。新しく展開する若葉とみずみずしい枝にほれほれとしました。剪定の際には、古くなった枝を何本か枝元から払いました。思えば3年ぶりになります。

コロナ禍の前、芦屋教会では、ボンヘッファーの『共に生きる生活』をテキストに学んでいました。私たちが礼拝を共にすることの大切さを、これほど明晰に短い文章で言い表しているものは他にないように思われます。「キリスト者たちが体をもってその場にいる、このことが、信仰者にとって、何にも比べられない喜びと力づけの源である」(私訳。以下も同様)。

しかも、私たちは一人でいるときもこの交わりと共に生きる、それを喜び感謝いたします。今、私たちは自由の中にあり、体をもって共にある歩みをつくることができます。けれども以前と同じではありません。現在の私たちの状況はボンヘッファーが置かれた状況とそのまま重なるわけではありませんが、彼の言葉から豊かな示唆を与えられます。

この世界の中で、一つの群れが、見える形で神の言葉と聖礼典を求めて集まることができる。これは神の恵みにほかならない。……共に集まる歩みは、今日のキリスト者によって、ふたたび恵みとして理解される。すなわち驚くべきもの、キリスト者の歩みにおける「薔薇とゆり」(ルター)であると。

他方で、キリスト者たちは、共に集まる歩みが神より賜る贈り物であることを忘れやすい。それゆえ、彼は勧めの言葉を記します。「だから、私たちが現在もキリスト者のきょうだいの交わりのうちに生きられることは恵みであり、恵み以外の何ものでもないことを知りなさい。」

私たちはコロナ禍の体験において、私たちの歩みにおける「薔薇とゆり」の素晴らしさを再発見する機会を与えられているでしょう。ボンヘッファーの言葉にパウロの勧めが重なるようです。喜びなさい。もういちど言います。喜びなさい。なぜなら、主の日の礼拝が意味するものを知っているのですから。